
千の雨は虹を描く。

ベーやんぐる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千の雨は虹を描く。

【Nコード】

N8220U

【作者名】

ベーやんぐる

【あらすじ】

長谷川千雨は一見するとどこにでもいる普通の女子中学生である。しかし、彼女には麻帆良の誰にも知られることのなかったある秘密があった。それは天狗の血を受け継ぐ一族の傍流であること。千雨は先祖還りで特にその血が色濃く発露すること。そして、修行によってその力を引き出す術を得たこと。そんな彼女が魔法や裏の世界に関わっていく話です。

第一幕 「望んで関わるわけではなく(前)」 (前書き)

夢幻街を読み返すと弱すぎず強すぎない丁度良い戦闘力で且つ好きな要素なので千雨に入れてみようかと思いついてみました。戦闘場で描くのは大分先ですし、本文でそれに触れるのも今回ではないのですが。

お目汚しにならないならば幸いです。

第一幕 「望んで関わるわけではなく(前)」

麻帆良学園本校女子中等部の2年A組に在籍する長谷川千雨を一言で表すなら、担任の高畑・T・タカミチをして没個性と評せざるを得ない。

もっとも、これは個性派揃いである他のA組生徒と比較した結果であり、副業というより本職のため頻繁に出張を繰り返す高畑にとっては表層的な印象しか抱けないというのが実情だった。

担任であり教師という職に就く人間としては無責任にも程がある態度であるが、無意識の内に彼自身が教職はあくまでも副業という認識をしていたのならば窮めて自然な現状ではあった。

しかしそれで千雨本人が困るということもなく、むしろ当人にとっては周囲へ没個性という評価を抱かせることはプラスに働いてもマイナスに働くことはない。

勉学の成績は学年トップの少し下程度を概ねキープしており、体育も人間離れたクラスメイトの前では霞む程度に「抑えて」いたため、それなりに優秀であるが突出したものが無い生徒として、周囲には影薄い存在として認知されていた。

外見は野暮ったい三つ編みに丸縁眼鏡が印象的で、その偽装に隠された容姿の妍に気付く人間は観察力の鋭い者の中でも極々少数しかいなかった。

日々の態度も社交的とは言い難く、挨拶をされれば返すし質問には即座に答えるのだが、滅多に開かない口からは始終素っ気ない言葉しか紡がれることがない。おまけに言葉使いはやや乱暴である。

端的に言えば、自分から他者に関わるような行為の一切を拒否していると思えない言動だった。

常軌を逸した社交的なクラスメイトも最初は何かとA組という明るく快活な集団に千雨を引きずり込もうとをしたが、判りやすく明確な壁を作ってそれを貫く千雨の堅牢さを破ることは叶わず、次第にその孤高さを受け入れていった。

そうして2年生の3学期を迎える頃には、空気のようにひっそりと埋没する没個性生徒の出来上がりである。

千雨は現状に後悔はしない。冷静に思慮した末、深く関わるべきではないと結論づけたゆえに。

その日、新しい担任が来るという話題で持ちきりだった教室の中で、千雨はイヤホンから流れるマイナーなクラシック曲に耳を澄ませながら、視線に意を一切込めずに自然に周囲を見回し、一通りクラスメイトたちの姿を視界に捉えてから、瞼を閉じて内心で溜息を吐いた。

——つくづく作為的過ぎんだよな、このクラス。

当人たちに責任は一切ないと確信してはおれど、千雨は同窓の少女たちの将来を慮って、醜穢な学園上層部に対して不快と嫌悪の念を禁じ得なかった。

現在この教室に集う少女たちの構成はあまりにも不自然だった。個性派を集めたにしては混沌とし過ぎているのだ。

人外の存在が名簿に登録されているのは、その最たるものだった。出席番号1番からして調べれば60年前の故人であり、現在は幽霊であるという事実。漫画のような誇大妄想じみた存在を放り込んでいるなど思考の埒外である。

入学当初の時分には「生徒を莫迦にするのも大概にしろ」と声を大にして言いたくなったほどだ。無論そんなことは決して言わない。その程度の忍耐は充分に備えていた。

しかしその忍耐を試すかのように、彼女を取り巻く環境の不自然さは次々と発覚していく。

電子機器と魔法技術による機械式の自動人形や悪名高い真祖の吸血鬼、最高位の悪魔や半魔族の殺し屋、段平から手を放さない半鳥族と、クラスメイトの人外率六分の一など意図せねば無理であろうに。

さらに他へ目を向ければ出るは出るは、生物学的には紛れもなく人間でありながら、個性派揃いという言葉では到底納得できない面子たち。

関西呪術協会の長の娘であり西の近衛家の姫君だとか、余裕で自動車に併走するそのルームメイトだとか、ござる口調がわざとらしくて痛々しい忍者もどきだとか、アルアルと似非中国人臭い言葉使いの中国人だとか、あらゆる面で天才の異名を欲しいままにする完璧超人だとか、挙げれば挙げるほど腹立たしくなってくる構成である。

出席番号29番の雪広あやかも千雨にしてみれば至極不自然な生徒だった。当人の人格はともかくとして、である。

幾ら麻帆良が学園都市でありそれなりの名門校であろうとも、大財閥の御令嬢がこうも姦しいにも程がある庶民（が大半）のクラスで机を並べ、ともに学ぶだろうか？ 千雨の考えは否だった。

世界でも上から数えた方が圧倒的に速い名家の令嬢ならば、それに見合った学校に通うのが自然だろう。それを言えば近衛木乃香も当てはまるが、そちらは裏の事情もあると読んでいたため、さほど疑問でもない。

表の人間であり裏について何も知らないあやかはそのことを疑問に思わないのだろうか？

思わない、というより思えないのだろうか？ 周囲によってそうさせられているのかもしれないし、その可能性は低くはないと思う。また、雪広家ほどの名家ならば裏の事情も相応に知り得ているはずである。ならば娘の個人的な同年代の伝手——人脈を与える目的で敢えて麻帆良に寄越している可能性も、なきにしもあらずといったところだろう。

千雨の思考が穿っているせいか、深読みもやや疑心暗鬼になりがちだったが、それほど的外れな読みでもないと彼女は確信していた。そうして一通りクラスメイトたち総てに突っ込みを入れつつ、その中に埋没しているとはいえ己が含まれている事実を鑑みて、内心から洩れた感情から溜息を口から吐いてしまう。

千雨は自他ともに認める表の人間である。少々、それなりに、かなり、真っ当な表の人間より多々種々と逸脱している部分があるのは否定しようがない事実であったが、そうした部分を知る人間は千雨当人を除けば存在しないため、自身がこのクラスに編入された理由は当然別にあり、千雨の慮外な才のせいであった。

入学当初に割と本気を出して調べた結果、あっさりとそれを知ることは叶った。もつとも、千雨が本気を出せば電子の海に保存されている情報で知り得ぬことなど無いと自負しており、むしろ秒殺といえるほどの短時間のハッキングでこれだけ容易に侵入を果たし、様々な情報を得ることができたために、逆に麻帆良の情報管理の甘さに眩暈がしたほどだった。

そんな心労で堪りかねた千雨の知り得た、己がA組に編入された理由とは——「電子精霊使いの適性A A A+」という何時調べられたのかも判らない魔法使いとしての己の才能らしき評価だった。

ナンダソレハ。

続いて他のクラスメイトたち、特に裏のことなど一切知らない者たちのことも調べて見れば、皆何かしら魔法使いとしての才能や適性、または魔法使いを現場や社会的な面で支援することのできる要素を持っている者ばかりではないか。

詰まるところ、A組の生徒は麻帆良という草刈場で見出した玉と原石を青田買いするという目的で集められた都合の良い道具候補ということだろう。

逆に考えればそんな者たちを一つのクラスにまとめるメリットがイマイチ掴めなかった。

実際、拭いきれないというか隠す気すらないのであろう不自然さのために、千雨がわざわざ調べ上げたほどである。目端の利く者が目にすれば怪しいことこの上なかった。

それほどこういった面々を一所に集めるのは疑心を煽るデメリツトがあるのだが、現状ではこれ以上は推測の域を出ないため、結論は変わらなかった。

そして千雨は己の秘事を決して他者に漏らさず、且つ、麻帆良では誰とも深く関わらないと、そう決意したのだった。

良識という言葉に喧嘩を売っているような非常識さが当たり前の麻帆良に慣れた心算であったが、こうして体験する度に良識の徒を自認する長谷川千雨は思うのである。巫山戯るな、と。

今、彼女の目の前で展開されるのは、担任教師として紹介された齢10歳の天才児がクラスメイトのおもちゃになっている図である。つくづく神は死んだ。そう思わずにはおれない。神社仏閣に詣で

るのは今年限りで止めるべきだろう。喜捨も「情けは人のためならず」である。効果が認められないなら賽銭も無駄でしかない。募金箱に投入する方が有意義だった。

さらりと流す周囲に諦観と呆れを感じつつも、千雨はもみくちゃにされる担任教師を底のない暗闇の瞳で冷徹に品定めしていた。

幸い、この視線に気付く人間はいなかった。そう、人間は。人外連中の一人二人は気付いた気配を感じるが、決して悪意や害意は発していなかったため、警戒まではされていない。

そうして観察した結果、千雨はこの狂気のクラス構成の最たる理由、最後のピースが眼前の幼い魔法使いにあるのだと確信した。

魔法使いだというのは杖の存在と、教室に入った時に落下してきた黒板消しトラップが一瞬静止した事実で充分過ぎる証左だろう。

クラス構成の原因というのも十中八九間違いないだろう。何せ、目の前の子供は「スプリングフィールド」と名乗ったのだ。

千雨は調べた情報の中にあつた、いわゆる魔法使いたちの本拠地である異世界で行われた大戦の英雄と同姓なのである。名前も音が一字違うだけで、その相違点を直せば同姓同名となってしまう。

無論、英雄に憧れた一般の魔法使いが子供に似たような名前を与えた可能性も否定できないが、そんな者をこの麻帆良で、このクラスに担任として宛がうだろうか？

おそらく、あの子供の従者とやらにするためのクラス編成の可能性が極めて高い。千雨は内心で苦虫を百匹噛み殺したような吐き気を催した。

魔法使いたちの真意は彼等の単純な言動から容易く分析はできる。行動の大半は善意の心算なのだろうが、身勝手な善意は悪意と何ら変わらないという「ありがた迷惑」という言葉を知らないのだろうか。

——まあいいさ。勝手にやってくれ。私は知らねーし。

この時の千雨は、理性の面で間違いなくクラスメイトの総てを見捨てていた。

それは彼女の本心であるし、流石に二年近く共に過ごした少女たちに情が芽生えてないといえば嘘になるが、それでも我が身の可愛さの前には取るに足らないことだった。

言い訳をするならば、クラスメイトの中には元々関わっている者これから間違いなく関わるであろう者が半数もいるのだ。そんな連中に付き合う義務は当然なく、ましてや義理もない。

残りの半数がその彼女等と密に接し関係をもっている現状、某大国よりも団結力のあるA組の少女たちは芋づる式に引きずり込まれるだろう。望む望まざるに関わらず状況によって。

そうなるように仕組まれるはずであろうし、このクラス編成となった時点で既に詰んでいるのだ。裏に関わるのは火を見るより明らかだった。

憐憫の情を禁じ得ない未来予想であるが、それにわざわざお節介を焼くほどの惻隱の情は持ち合わせてはいない。

少なくとも、この時の千雨はそうしたスタンスを貫いていると自覚していた。

もつともその日の内に、彼女のこのスタンスが罅割れることになろうとは、さしもの千雨も想像だにできなかったであるが。

放課後、担任教師となった子供先生の歓迎会を断った千雨は、帰りがけに校内のポストへ趣味物の書類袋を投函し、すわスーパで今日味わった鬱屈した気分を癒すために豪華な食材を購入しようかと通りを歩いたところで、ある現場に遭遇した。

「――っ!!!」

短い悲鳴が耳に届く。千雨はこの日が近来稀な厄日であると、痛切に実感した。

手摺が無いという、安全管理を甚だ疑う階段から、クラスメイトが転落したのだ。

先ほど見捨てると決意したばかりであったというのに、己は一体何をしているのやら。

理性的な判断を通り越して、身体は咄嗟の出来事に反応して駆け出していた。自身がどういった行動を取ったのかに気付いたのは、その転落するクラスメイト――宮崎のどこを受け止めるべく落下地点に到達してからだった。

仮にこれが身体能力に秀でた他のクラスメイトだったならば、千雨も決して動かず見逃したことだろう。事実、この程度では怪我をしないであろう面子は、クラスにそれなりの数が在籍していた。

しかし、今回転落したのは宮崎のどこかである。裏とは何の係わりもなく、尚かつスポーツは苦手で小柄な身体がいかにもか弱く、また気も弱い小動物系の少女。

また性格は内向的で「本屋ちゃん」などとあだ名を付けられるほどの本の虫でインドア派である。受け身など到底取れるとは思えなかった。

目の前で毎日のように顔を合わす人間が大怪我をするのは必至だった。さらにいえば、下手をすれば死ぬ確率も低くはないという予

想に至った。ゆえに、手を出してしまった。

普段は他者を寄せ付けない一匹狼のスタンスを貫いてはいても、目の前で他者の命が失われる事態を看過できるほど千雨の壁は強固ではない。

外敵に対しては一切容赦しない千雨であったが、それ以外に対しては割り切れてなどいなかったのだ。あくまでその心算でいただけ。覚悟のない甘さの現れだった。

そんなところで師匠に似なくてもいいではないか。他者の生死や見知った顔の安否が関われば、どうにも見捨てておけないというのが千雨のさであった。

それは千雨の生来の気質であり、師匠譲りでその性質が強化されたものである。

だが、今回ばかりは己の行動に慚愧の念が堪えなかった。

——やらかした。

千雨は心中で苦々しさを噛み締め、浅薄な己を嘲う。結果的に見れば、千雨がしたことは余計な真似でしかなかったのだから。

千雨がのどかの真下に到達するのと同時に響く異国の言葉は、魔法使いが魔法を使用する際に口にする力ある言霊——呪文詠唱と呼ばれるものだった。

その呪文の効果によって、頭上で宮崎まどかが数秒浮遊したのである。

不可思議な現象だった。物理的に不自然だろう。当然ながら千雨がやったことではない。

では結論は一つだけだった。即ち、第三者、それも魔法使いのどかを助けたということ。

ここで問題なのは千雨がしゃしゃり出た行為そのものではない。その程度なら意外に映る程度のものだろう。

問題となったのは、千雨が移動した距離と速度だった。

千雨は転落を視認した場所から現場の落下地点までの140メートル弱を、わずか1秒足らずで走破したのだ。単純計算で時速300キロという非常識な速度で移動したことになる。

他者に目撃される事態を考慮すれば、特に麻帆良の裏側である魔法関係に一切関わらないのであれば、これは悪手以外の何物でもない行動だった。

周囲の気配を探るのを怠ったのも間違いである。

現在、こちらに意識を向ける人間が少なくとも三人は確実にいる。さらにそれ以外にも、ややぼやけた感じのする視線を感じた。

その視線は彼女にとって馴染み深いもので、おそらく遠見や千里眼といったものを使っているのだと推察できる感触だった。

これは間違いなく目を付けられたと見ていいだろう。厄介なことだ。

一秒に満たない時間の中で悔恨の苦味を表に出さずへこんでいると、思い出したかのようにのどかが静止状態を終えて千雨の上へと落下した。

のどかを両手で丁寧に受け止めると、腕の中の少女が転落時に手放した数冊の書籍を片足で軽くいなす。その間、彼女の状態は決してぶれなかった。

蹴り足が与え、または殺した慣性によって、書籍は石畳に綺麗に積み重なった。

四隅が綺麗に揃って積み上がった書籍の様子から解るのは、千雨の驚異的な股関節の柔軟性と、絶妙な力配分によって為された蹴足の器用さだった。

千雨は溜息を吐いてゆっくりとのどかの脚を地面に付け、ゆるりと華奢な肢体を放してゆく。

「あ、あれ……………長谷、川、さん？」

「——今度から階段使う時は気をつけろよ」

命に危険を垣間見て未だ呆然としているのどかに忠告すると、さて、こちらに意識を向ける者たちの顔を拝んでおこうか、と千雨は己より身長の高いのどかを見下ろしながら、肉眼に重なるように《眼》を見開いた。

見る。

周囲上下左右360度を視界に収める。彼女を中心に視野は瞬く間に広がっていき、取り敢えずとばかりに方百間まで拡張された。微風による木々のさざめきや小鳥の囀りなどが「見て」脳内で「聞こえる」ほどに鮮明な映像として長谷川千雨に視覚情報が集まってゆく。

視る。

こちらを目を見開いて注視する少年と少女が二人観測される。その二人はよりにもよってクラスメイトである神楽坂明日菜と、担任となったネギ・スプリングフィールドである。

放課後まで布にくるまれていた杖が顕わとなり、それを携えていることからのどかに魔法をかけたのはこの子供先生で間違いないだろう。

その行為には素直に称賛するが、こんな往来で魔法などを行使したのは些か軽率ではないか？ 己の所業を棚に上げ、千雨は恨めしい気持ちでネギに視線を向けずに睨み付ける。

観る。

遠くからこちらを窺う――正確にはネギに注目を浴びせる視線を追うと、木立の陰から担任、既に元担任となった高畑がいた。

何故こいつがいる？ 千雨は疑問に思った。ネギもそうだが、こんな場所にこのタイミングで高畑まで居合わせるだろうか？

高畑が大戦の英雄とともに戦ったという情報も知っている。英雄の息子を気に掛けるのも、まあ判らないではない。中年オヤジが子供をストーカーしているというのも、理解はできる。

しかし、赴任初日に魔法で人助けをする英雄の息子、それを陰ながら見守る英雄の仲間。作為を感じずにはおれない状況だった。

遠くからこちらを覗く不躰な視線の方は、追えないこともなかったがそうすると限りなく高い確率でこちらが見返していることを知られるだろう。

それほど高畑同様にネギを注目する視線は高度な術法で編まれており、その感触からかなりの老獪さを肌で感じるほどだ。

そんな真似ができる人物でこの場を見る者となると、裏において高畑の直接の上司である可能性が高い。

そして、察る。

麻帆良のナンバー1とナンバー2が覗き見する「魔法で人助けをした英雄の息子」。

そして現状で唯一の目撃者はクラスメイトである神楽坂明日菜。
作爲的過ぎて嗤ってしまふ。

明日菜本人は裏についての意識は一切ないだろう。当人はどこに
でもいる――とは言い難いが、明るく前向き、脳天気で元氣潑刺な
女子中学生である。千雨すらも欺く擬態でなければ、人格的に何ら
怪しいところはない。

しかし、彼女の素性はこの上なく怪しかった。身元保証をしてい
るのは学園長である近衛近右衛門で、保護者となっているのは高畑
なのである。

おまけに身体能力は常人離れしており、麻帆良でも上から数えた
方が圧倒的に早いほどの馬鹿力の持ち主でもある。

さらに付け加えるなら、こちらも魔法世界の大戦で英雄となった
近衛詠春の娘である木乃香のルームメイトであること。

木乃香の生まれと境遇を鑑みれば、同室となるのは同じ出身地を
持ち裏の剣客であろう桜咲刹那が妥当であるにも関わらず、その刹
那を押し退けて同室となったのが明日菜なのだ。裏があると考え
るのが自然だろう。

彼女が修めた技能の一つ、《透視》によって集めた視覚情報から
得た判断材料を、加速する思考時間で組み合わせてゆく。それらを
摺り合わせる中、次第に猜疑心が頭を擡げてしまふのを止めること
ができなかった。

そうだ、そもそも何故階段に手摺がない？ そんな階段はここだ
けか？

のどかが転落したところにそう都合良くこれだけの面子が集まる
だろうか？

イレギュラーであろう自分がいなければ、おそらくネギが魔法で助けただろう。だが、それは本当に偶然居合わせたからか？

都合良く2年A組の関係者だけがこれだけ集まるだろうか？　そもそもこの時間帯ならば他にも目撃者はいるはずである。だというのは、現状は千雨も含め、離れた場所にいる高畑も入れて五人しかこの場にはいない。

そして、幾ら英雄の息子とはいえ、覗き見しているであろう妖怪学園長が都合良くこの場に注目しているだろうか？　偶々の可能性、実は四六時中ネギを見守っていたという可能性も無いでは無いが、千雨はこれが一種の自作自演イベントであることを疑わずにはおれなかった。

千雨が疑心暗鬼となっていると、不意に明日菜が猛然とした勢いでこちらへ向かってくる。

——なんだ？

「あんたたち、ちょっとこっちに来なさーいっ!!」

気付けば腕を捕まれていた。そして引き摺られていた。それも身体が宙を浮くほどの速度でだ。

千雨が横を見れば、ネギも反対の手で捕獲されている。襟元を捕まれるそちらよりはマシだろうか、などと冷静に考えるのはちよつとした現実逃避だった。どうしてこうなった。

明日菜に捕まった二人は互いに目を合わせ、互いに現状がイマイチ認識していないのだと判りわずかながらも仲間意識が芽生えた錯覚を起こす。

そんな逃避もすぐに終わりを告げた。そのまま真っ当な女子中学生とは信じられないパワーで緑地帯へと連れ込まれることで。

「あんたたち、二人とも今さっき何をどうしたのか、きちつと説明してもらおうわよっ!？」

第一幕 「望んで関わるわけではなく(前)」 (後書き)

半端なところで切ったなあ、と思いますが、この赴任初日の出来事がけっこう長くかかりそうなので切ってしまいました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8220u/>

千の雨は虹を描く。

2011年8月17日21時35分発行